

## Floppy's Phonics Stage 6 'The Castle Garden'

p.1

アネーナは教室でビフの隣に座っていました。

「私、劇のお話を書きたいの」アネーナは言いました。

「おとぎ話がいいな」

「私にも役をくれる？」

p.2

「でも、どうやって書き始めようかなあ？」アネーナは言いました。

「うーん」

「出だしがすごく難しいのよね」

p.3

「むかしむかし…」アネーナは書き始めました。

「遠い遠いところにお城がありました」

p.4

お城には大きな庭園があって、美しい緑の回廊や花壇がきれいに並んでいました。

p.5

お城にはチャーリー国王とタラ王女が住んでいました。

p.6

「愛しい娘よ」チャーリー国王はタラ王女に言いました。「そろそろおまえも結婚する時期だ」

p.7

「公爵でも、王子でも、国王でも好きに選べるぞ。おまえ次第だ」

「いやよ、お父様！私は夫などいません」

pp.8-9

チャーリー国王はあちこちに招待状を送りました。

「わが城へご招待いたします……」王様は続けます。

「……美しいタラ王女は現在夫となるべき人物を捜しております。その人物は裕福で、50歳以下であることが条件です」

「“大変裕福”とした方がいいかな」

pp.10-11

タラ王女は怒っていました。

「こんなのバカげているわ。ほんとにせっかちなんだから。

こんなやり方で恋なんかできないわ」王女は言いました。

「そんなに難しいことじゃないんだが」

p.12

ある人がお城にやってきました。

「私はジムジャー王国の国王だ」その人は言いました。

「馬車をとめるのが大変だった」

「全部駐車できました」

p.13

「私はタラ王女のために最高級のじゅうたんをもってきましたぞ。それは高価なものです」

「じゅうたんなんかいいりません」

pp.14-15

今度は皇帝がお城にやってきました。

「私はカンディバル帝国の皇帝である」皇帝は言いました。

「馬車 10 台に絹をいっぱい入れてもってきました。

ほら、ものすごい長さでしょう。手織りの絹ですぞ。」

「絹もいいりません」

「馬車がとめられませんか」

p.16

次に王様がやってきました。「私はカザール国の国王だ」と言うと、「最高級の香水を持ってきたぞ」

「ご主人様、駐車できません」

p.17

「私はフランスからきたタークインです」ある騎士が言いました。

「タラ王女のために金と銀をつめた箱をたくさん持ってまいりました」

「駐車場がいっぱいです」

p.18

「ひどすぎるわ」タラ王女はそう言って、庭園に走って行きました。

「あの、失礼ですが」声が聞こえました。

p.19

それは庭師のカールでした。タラ王女はなぜ自分が怒っているのか説明しました。

「私はずっと前からあなたを愛していました」カールが言いました。

p.20

「でも私はあなたに愛される資格はありません」カールは悲しそうに言いました。

「私は庭師です。無理に決まっています」

p.21

「私もあなたを愛しています」タラ王女は言いました。「ずっと前から好きでした。すぐにお父様に話しに行きましょう」

p.22

タラ王女はカールを国王のところに連れて行きました。

「お父様、カールは庭師です。でも私は彼をとっても愛しています」王女は言いました。

p.23

「この種を見てください、お父様。私にとっては金や絹やじゅうたんよりずっと大切なものです」

「なんということを、タラ！」

p.24

「すてきなお話だわ」ピフが言いました。「それで、2人はそれから幸せに暮らしたの？」

「それはね！」アネーナは言いました。「まあ見てて」